

氏名(本籍)	今井夏子(埼玉県)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	甲第117号
学位授与年月日	令和5年3月15日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	幼児期の屋外遊びの有用性とその促進に向けた方策に関する研究
審査員	主査 日本体育大学 教授 野井真吾 副査 日本体育大学 教授 岡出美則 副査 日本体育大学 教授 鈴川一宏

《論文審査結果の要旨》

子どものからだと心の育ちに「遊び」が不可欠であることは誰もが認めることである。しかしながら、日本では子どもの屋外遊びが減少し、子どもの身体的、精神的健康への負の影響とともに、社会性の育ちが心配されている現状がある。他方、近年の屋外遊びの減少には、電子メディアの普及や保護者の習いごと志向に伴う子どもの多忙化や安全志向に伴う遊びの規制等、多くの環境要因が複合的に影響している。また、このような状況は保育所や幼稚園においても例外とはいえない。そのため、幼児期の子どもの屋外遊び経験を確実に保障するためには、子どもの屋外遊びの生起要因を検討するとともに、屋外遊びを促進するための手立ての提案が必要である。

以上のような問題意識の下、本学位論文では幼児期の子どもの屋外遊びと社会性との関連、屋外遊びを生起する環境要因、屋外遊びの実態に関する諸検討を通して、幼児期の子どもの屋外遊びを促進する方策を提案することを目的とした。そして、第1章では幼児のスクリーンタイムが社会性に及ぼす影響、第2章では幼児期における遊びの種類数や降園後に遊ぶ人数と実行機能との関連、第3章では幼児期の遊びの種類数や人数に関連する生活状況・家庭環境要因、第4章では幼児の園内での屋外遊びの実態ならびにその有用性がそれぞれ検討された。各章の概要は以下の通りである。

第1章(研究課題1)では、幼児期の子どもにおけるスクリーンタイム、身体活動、遊びの種類、社会性に関する諸データを同時に投入し、スクリーンタイムと社会的スキルとの関連について媒介分析を用いて検討した。その結果、身体活動強度はスクリーンタイムや社会性と関連しない様子が示された。一方で、かくれんぼや木登りなどの屋外遊びは、スクリーンタイムが社会性に及ぼす負の影響を減衰させる可能性を示した。これらの結果は、遊びの種類によってスクリーンタイムや社会性への影響が異なることを示唆しており、特に屋外遊びでの中との交流の多さが社会性に好影響を及ぼす可能性を推測させた。

このように、屋外遊びでの他者との関わりの多さが社会性に作用する可能性が推測できたことは第1章の成果であると考えられる一方で、それらの遊びが何人で行われていたのかは明らかにできていない。加えて、いずれの測定項目も質問紙調査でのデータ収集に止まっていることから、より客観的な指標で

の検討も必要である。そこで第2章(研究課題2)では、屋外遊び経験の有無に加え、遊んでいる人数にも着目して、子どもの社会性の身体的基盤ともいえる実行機能を測定し、幼児期の子どもの屋外遊びの種類数、遊ぶ人数と実行機能との関連を検討した。その結果、屋外遊びが多い幼児は、そうでないよう児に比して抑制機能が高い様子が確認された。さらに、屋外遊びが多く、遊ぶ人数も多い幼児より抑制機能が高い様子も示された。

第3章(研究課題3)では、第1章、第2章の検討をさらに発展させて、幼児期の子どもの遊びの種類や遊ぶ人数に関連する生活要因ならびに家庭環境要因を検討した。その結果、共働き家庭の幼児は、片働き家庭の幼児に比して遊びの種類や人数が少ない様子が示され、遊びの種類や人数を増やす手立てとして、子育て家庭への社会的支援が喫緊の課題であることが示された。

第3章の結果、共働き家庭の子どもは片働き家庭の子どもに比して遊びの種類や人数が少ない様子が示されたが、これを根拠に就労形態を提案することはできないし、そのような提案はナンセンスでもある。そのため、社会全体で幼児の遊び機会を増やす取り組みが求められるといえる。そのような中、子どもたちが平等に遊びの機会を得ることのできる幼稚園は注目に値する。ところが、園内の遊びの実態に関する先行研究では、保育者によるインタビュー調査や活動量の測定に止まっており、幼児が実際に園内でどのような遊びを行っているかは明らかにされていない。さらに、子どもの主体的な自由遊びを保障していくためには、屋外遊びの実態を明らかにすることやリスクを伴う遊びの有用性を示していく必要があるといえる。そこで第4章(研究課題4)では、幼児の園内での自由遊び場면을観察し、社会性との関連を検討した。その結果、対象児は鬼ごっこや遊具遊びに多く従事し、平均4.4人で遊ぶ様子が示された。また、リスクを伴う遊びは全体の12%であり、諸外国の先行研究に比して少ない様子が確認された。さらに、リスクプレイを頻繁に行う幼児は、仲間を助ける、片付けを手伝うといった向社会性行動をとることが明らかになった一方で、落ち着きのなさや癇癪を起こすといった行動とリスクプレイとの関連は認めなかった。

これら各章での研究知見を踏まえて、本学位論文では「リスクを伴う遊びを含む園内での多様な遊び経験の保障」が提案された。

審査では、本学位論文が日本の子どもの屋外遊び減少とそれに伴う社会性の育ちへの危惧といった現代的健康課題の解決に向けて重要な研究知見を提供しているだけでなく、先行研究では十分に検討されてこなかった幼児期の子どもの遊びの種類や人数、遊びとの関連が推測される家庭環境要因等に関する検討に真摯に向き合っていることが高く評価された。また、保育・教育現場でのフィールド調査には、調査園・校や対象者との信頼関係が不可欠である。その点、調査園と連携を取りながら、調査を企画、実行し、得られた研究知見を学術論文にまとめ上げるとともに、調査園にもその成果をフィードバックするという一連の作業は、申請者が自らの力で研究を立案、遂行、解析、解釈、公表するという研究者としての力量を十分に兼ね備えている証であることも確認された。一方で、研究題目、問題意識については審査員の指摘を踏まえた再検討が必要であることも確認されたが、全般的には各審査員の質疑に対

して、的確かつ真摯に応答する様子が確認できた。

以上のことから、審査員全員の一致を持って、今井夏子氏が博士（体育科学）の学位を授与されるに十分な学力と見識を有しているとの判断に至った。

《最終試験結果》

合格 ・ 不合格

2023年1月13日